

幼児期の箸の扱い方の支援方法の確立に関する研究

第一報 幼児の手指機能を考慮した発達支援の効果について

大岡貴史¹, 板子絵美², 飯田光雄², 久保田悠¹, 拝野俊之¹, 山中麻美¹, 横山重幸¹, 石川光², 向井美恵¹

1) 昭和大学歯学部口腔衛生学教室

2) ピジョン (株) 中央研究所

【はじめに】

箸を用いた自食機能の発達についての研究は、これまでに広く行われており、箸の持ち方や動かし方、食物のとらえ方などの発達変化に関して定量的な観察も行われ始めている。一方で、箸を用いた自食機能の支援方法に関する報告はほとんどみられず、支援の内容とその効果についての研究も数少ない。本研究では、箸を用いた自食機能の支援方法の確立を目的に、幼児の手指機能と箸の持ち方および動かし方を評価し、その発達過程を考慮した支援を行った場合の機能変化について検討を行った。

【対象と方法】

対象は、3歳から5歳（月齢39～83か月、平均58.7±14.7か月）までの幼児10名（男児2名、女児8名）である。対象児の箸の持ち方および動かし方を2台のデジタルビデオカメラで記録し、三次元動作解析システムにて手指の動きを解析、検討した。また、鉛筆でのDENVER IIに記載されている「微細運動一適応」の中から描画課題を選び、その課題を行う際の鉛筆の持ち方、動かし方をビデオカメラで撮影し、手指の微細運動機能を評価した。

【結果】

箸の動かし方では、交差せずに箸を動かせる児が3名（月齢54, 63, 83か月の児）、箸頭で箸が交差する児が3名（月齢41, 53, 66か月の児）、中央で箸が交差する児が2名（月齢39, 69か月の児）、遠箸を手前に引きよせて交差する児が1名（月齢71か月の児）、握り箸が1名（月齢44か月の児）であった。

交差せずに箸を動かせる児には、遠箸の動かし方の指導を行い、箸頭で交差する児には、中指を2本の箸の間に入れるように指導した。また、中央で箸が交差する児には、拇指を動かさずに箸を操作するように指導した。一方、握り箸の児には箸の動かし方の指導は行わず、箸を拇指から環指までの4指で持つように指導を行った。

【考察】

幼児期の箸の動かし方は多様であるものの、近箸、遠箸が交差する動かし方から徐々に箸が交差しなくなり、伝統的な動かし方に推移する発達過程をたどると考えられる。その中で、幼児の手指機能の発達および箸の扱いの習熟が大きく影響するため、それらを考慮した指導・支援方法の確立が必要と思われる。今後、今回行った指導が箸の扱い方にどのような影響を及ぼすのかを検討する予定である。